

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730356

研究課題名（和文）リスク負債のオンバランス化の研究

研究課題名（英文）Research on the Accounting for the Liabilities with Uncertainty

研究代表者

久保 淳司（KUBO JUNJI）

北海道大学・大学院経済学研究科・准教授

研究者番号：70322790

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、企業のリスクを財務諸表本体で認識・測定するための理論を構築することである。本研究によって、アメリカの会計基準における認識・測定の過程の検討を通じて、財務諸表に表示すべき会計上のリスク概念が明らかになった。また、偶発支出を認識対象にする会計処理方法と不確定支出を認識対象にする会計処理方法の並存を前提とした、リスクに関する会計処理方法の枠組みを提示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to establish a framework of accounting for the risks. As a result of this research, risks that should be shown in the financial statements are clarified. And, two accounting methods for risks were found in US GAAP. The one is suitable to recognize the contingencies, and the other is suitable to recognize the indeterminate expenditures. A framework for the risk accounting is presented as a integration of the two accounting methods.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経営学，会計学

キーワード：財務会計，負債，不確実性

1. 研究開始当初の背景

リスクに対する社会的な関心が高まっており、現在はリスク社会であるとの指摘もされている。予期し得ない問題が生じて「優良企業」が突然に破綻する例も増加している。このような現状から、企業が曝されているリ

スクに関する情報提供が必要になってきている。

個別の資産に内在するリスクあるいは測定値に係るリスクを財務諸表に反映させる工夫は古くからなされてきた。しかし、企業の総体が曝されているリスクを財務諸表に

反映させるには至っていない。

リスク情報は脚注その他における開示で警告としては十分であるとも主張される。しかし、リスクへの社会的な関心が高まっている状況において、リスク情報は単に開示されていけばよい類の情報ではなく、財務諸表本体への計上が必要な会計数値である。リスク情報も単なる警告情報として捉えるのではなく、財務諸表の本質的機能に関連させることが必要なのである。

2. 研究の目的

本研究は以下の2つのことを明らかにすることを目的とする。

第1に、会計基準におけるリスク概念、不確実性の機能、条件付債務の会計、待機債務概念、伝統的な負債理論との関係を検討し、会計の対象とすべきリスク概念およびその理論的根拠を明らかにすることである。

これらの検討では、負債計上に関する不確実性の扱いを異にする2つの会計基準の潮流を中心的題材にする。現在の不確実性に関する会計基準には2つの潮流、すなわち、SFAS5を中心にする潮流とSFAS143を中心にする潮流がある。両者の相違は不確実性を負債の認識規準として扱うか、負債の測定要素として扱うかにある。本研究では、2つの潮流に関連づけながら、負債計上における不確実性の機能を検討する。これにより、会計基準と整合するリスクの計上の理論的基礎を明確にする。

第2に、学際的な検討により、検証可能で有用な数値としてリスクを財務諸表に計上するためにリスク概念を精緻化することである。

保険論や信頼性工学などの分野では、大数法則や確率理論を利用して、リスクを算定する試みが相当程度進行している。これらの知

見のうち、債務をポートフォリオ的に把握する考え方は負債測定に援用可能である。さらに、社会心理学などの知見によれば、個人のリスクに対する態度はリスクからの期待損失には単純な比例関係にはないという。どのようなリスクをより危険と考えるのか、より避けたいと考えるのかといった条件の考察により、財務諸表に計上するリスクの情報としての有用性を高めることが可能になる。

3. 研究の方法

(1) 不確実性の会計についての検討を行う。不確実性に関する会計基準は、SFAS5、SFAS143、IAS37 およびこれらの関連指針など偶発事象の会計基準が中心的になっている。これらの会計基準には、不確実性を負債の認識規準として扱うか、負債の測定要素として扱うかに相違がある。このうち、不確実性を認識に関わる機能と捉えているSFAS5 および関連する解釈指針 (FIN14 等) を題材にして、偶発事象の会計基準において不確実性が認識規準とされてきた理由を中心に考察を深める。

(2) 不確実性に関する会計基準のうち、不確実性を測定に関連させている会計基準 (SFAS143、IAS37 および関連指針) を考察する。従来の認識規準としての不確実性が測定に関連する機能に変化したことの時代的背景等を探り、国際的影響の検討を行い、わが国の会計基準への影響について考察する。

(3) 他分野で用いられているリスク概念を渉猟し、本研究に援用可能なリスク概念を探索する。久保[2008]の検討にも利用した、保険数理論、疾病学、安全工学、経済学、心理学、社会学、文化人類学といった学術分野におけるリスク概念の研究動向をより詳細にサーベイする。

(4) リスク測定理論の適用手法を検討する。

保険論や信頼性工学などの分野では大数法則や確率理論を利用して、リスクを算定する試みが相当程度進行している。これらの知見のうち、債務をポートフォリオ的に把握する考え方は負債測定に援用可能である。他分野の測定理論を負債測定に援用することについての可能性と問題点を中心に検討を行う。

(5) 財務諸表に計上するリスクの有用性の確保を目的に、リスク認知論の適用手法を検討する。リスク認知論は社会心理学などの知見を中心に展開しており、これらの知見を考察する。さらに、会計上の保守主義についても再検討する。会計上の保守主義概念は、久保[2002b]で明らかにしたように、利得と損失に対する選好の非対称性と密接に関連している。したがって、リスクの量的な大小関係を会計情報として認識する際に考慮すべき要素になる。

(6) 条件付債務を題材に、伝統的な負債理論との関係を検討する。不確実性の機能の変化においては待機債務が重要な概念になっている。待機債務が会計基準に初めて現れたのは SFAS143 であった。その後、FIN47 で概念が整理され、現在は FASB と IASB との共通化プロジェクトで概念の精緻化が進められている。しかし、待機債務概念は必ずしも会計理論・会計実務から蒸溜されたものではなく、SFAS143 で用いられ始めた経緯には不明瞭な面がある。待機債務概念の考察を通じて、条件付債務に関する会計を検討する。とくに、SFAS143 の公開草案や公開草案へのコメントレターの分析を行い、待機債務概念の生成経緯と会計理論的含意、伝統的な負債理論との相違点を明らかにする。

(7) リスクの財務諸表への計上に関して、相手勘定の検討を行う。相手勘定が費用や負の資本になる可能性に留意しながら、今日進行している貸借対照表借方の理論との整合

性を考察する。この考察により、オンバランス化の今日的なフレームワークとの整合性を図る。とくに、将来的な新しい貸借対照表論の可能性を視野に入れながら検討する。

(8) 以上の研究を統合し、本研究の目標である企業が曝されているリスクを財務諸表本体で負債として認識・測定するための理論体系を構築する。

4. 研究成果

リスクに関する会計処理方法には SFAS5 型と SFAS143 型があり、両者の相違とその背景が明らかになった。まず、両者は、認識規準が不確実性事象の蓋然性の高低か債務性の有無かという相違に基づいて区別される。現行会計基準では、不良債権、偶発損失、税務不確実性に係る会計処理で SFAS5 型を採用し、ARO 負債、EDCO 負債、債務保証に係る会計処理で SFAS143 型を採用していることが確認できた。そして、SFAS5 型の対象は受動的性質の不確実性事象であり、SFAS143 型の対象は能動的性質の不確実性事象であるというように、対象とするリスクの性質が相違していることも明らかになった。とくに、受動的性質のリスクは「危険→対応→生起」という経路を辿ることから、SFAS5 型を適用することで損失の早期計上が可能になる一方、能動的性質のリスクは「決意→特定→生起」という経路を辿ることから、SFAS143 型を適用することで負債の早期表示が可能になることを明らかにしたことはリスク負債のオンバランスに関して重要な知見である。

現行会計基準における SFAS5 型と SFAS143 型は異なる対象に対する異なる会計処理としてを並存していることから、リスクに関する会計処理のフレームワークが2つの会計処理方法の並存する状況を説明する

ものとして提示される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①久保淳司, 偶発資産認識の会計処理判断プロセス—Johnson[1994]における'Lottery Ticket ケース'を題材にして, 経済学研究, 60巻4号, 77-94, 2011, 査読無。
- ②久保淳司, 不確実性事象の認識における蓋然性と債務性の機能, 会計, 178巻1号, 19-31, 2010, 査読無。
- ③久保淳司, 資産除去債務基準における資産負債の両建処理, 経済学研究, 59巻3号, 199-213, 2009, 査読無。

[学会発表] (計2件)

- ①久保淳司, 会計基準と概念フレームワークの整合性—将来支出事象の会計処理を題材として—, 第78回日本会計研究学会北海道部会, 2010年12月11日, さっぽろテレビ塔(札幌)。
- ②久保淳司, リスク事象の計上における蓋然性の位置づけ, 第68回日本会計研究学会, 2009年9月4日, 関西学院大学(西宮)。

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保 淳司 (KUBO JUNJI)
北海道大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号: 70322790

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし